

立

すなはち男をうめり、略ある時白川の院、熊野へ御かうなる、中その時たゞもり、やぶにい  
らも有けるぬかさを袖にもり入れ、御前へまいりかしこまつて、

いもが子ははふ程にこそなりにけれ、と申されたりければ、院やがて御こゝろえ有つて、  
たゞもりとりてやしなひにせよ、とぞ付させまし／＼ける、

〔榮花物語十三木綿四手〕一宮貞敦おはしまして、おとゞ藤原顯光原や、おきよく、むまにせんとおこし  
たてまつらせ給へば、我にもあらずおきあがり給て、たかばひして、馬にのせたてまつり給て、あ  
りかせ給へば、略下

〔類聚名義抄五立口驚反〕立タチトコロ 太正

〔伊呂波字類抄太字〕立タツ 起起坐

〔釋名三釋姿容〕立林也、如林木森然各駐其所也、

〔書言字考節用集八言辭〕立舉タテアゲル

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕正述心緒

立念居毛タテオモヒキテモ曾念紅之赤裳ソ オモフクレナキノアカモ スウヒキ下引去之儀乎、イニシスガタラ

〔源氏物語九葵〕おとゞはえたちもあがり給はずかゝるよはひのするにわかきかりの子にをく  
れたてまつりて、もこよふこと、はちなき給ふを、略下

〔北條五代記九關東の亂波智略の事

氏直條○北 亂波二百人扶持し給ふ中に、一の悪者有、かれが名を風摩と云、中夜討強盜して歸る  
時立すくり居すくりといふ事あり、明松をともし、約束の聲を出し、諸人同時にさつと立、颯と居  
る、是は敵まぎれ入たるを、えり出さんための謀なり、

〔書言字考節用集八言辭〕翹ツマダツル 文選註、  
足立也、